

歳時記のある暮らし

二〇二二年

《十月》

ハロウインの飾りもにぎやかな収穫の季節を迎えました。

皆様、おすこやかに過ごしてでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

银杏、金木犀、早生みかんが懐かしく香り、柿やさくらの甘味が増します。秋刀魚、栗や南瓜、松茸が店頭に並び食欲の秋の到来です。スポーツや行楽の秋、溪流での釣りもよいものです。凜とした空気、岩場の水の透きとおる輝き、川のせせらぎ、顔を上げれば赤や黄に染まり行く木々の梢。カワセミやセキレイの鳴き声に心が癒されます。

十月八日は「十三夜」。満月を愛でる「十五夜」のころよりも、空が透明度を増して月が明るく見える十三夜にもう一度お月見を楽しもうという風習です。秋が進むほど、高気圧が太平洋から大陸に移動するため、海育ちの太平洋高気圧特有の空気中の水蒸気が少なくなり、空が澄んで月が明るくくっきりと見えるようになるのですね。

「秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし」平安時代もカラスは、今と同じように人の近くで生活していたようです。清少納言は「枕草子」の中で、夕日が山の端に落ちかかるドラマチックな秋の夕暮れには、ねぐらへ帰るカラスでさえ、三羽四羽、二羽三羽と飛んでいると、しみみするものなのに、ましてカラスより美しくて立派な雁がきれいに隊列を組んで小さく見えるまで、遠くへ飛んでいく様子は素晴らしいとつづっています。

楓や漆、鳶は紅葉し、银杏やくぬぎ、柏が黄葉して、やわらかな白差しに美しく照り映えます。

素朴な琴

八木 重吉

この明るさのなかへ、ひとつの素朴な琴をあげば

秋の美しさに耐えかねて、琴はしづかに鳴りいだすだろう

秋の月、夕暮れ、紅葉など自然の芸術を美しいと感じる一方、これらには逆に負のイメージもあります。月のエネルギーが最高潮となる満月には、イライラしやすく、事故や

（裏へ続きます）

犯罪が起こりやすいといわれます。夕焼けの黒を混ぜたようなオレンジ色が刻々と深まっていくと、「寂しさが増長されることもあります。紅葉は、春のように新しい命が増えるのとは違い、枯れ行く姿なので、侘しさもあります。自然の感じ方に幅があるのは趣のあることです。月の満ち欠け、暮れ行く夕日、枯れ行く紅葉に美を見出すのは、時間がもたらす荒廃の中に美を感じる心があるからでしょうか。日本の感性のついに「わびさび」があります。「わびさび」の「侘(わ)び」という動詞は、とろろと落ちる、悲観するという気持ちを表し、「寂(さび)び」とは古びて趣が出るという美意識を表します。「わびさび」を楽しむ心は鎌倉時代に生まれました。平安時代、唐のお茶は貴族の嗜好品でしたが、鎌倉時代になると禅宗僧侶の栄西や道元が健康増進の薬としてお茶を日本に持ち込み、喫茶の習慣が広まりました。やがて、その喫茶に村田珠光(むらたしゅこう)という禅僧が精神的な意味を与えます。村田珠光は、「どちらの休さんで有名な一休宗純の弟子で、能阿弥(のうあみ)から礼儀作法を学びます。喫茶に禅の境地を融合させ、人をもてなす時空を作法化した「わび茶」が生まれました。その後、千利休や松尾芭蕉に「わびさび」の精神性が引き継がれ、不完全性や劣化、至らなさに価値を見出す日本人の美意識が確立されたと考えられています。割れた茶碗や漆器などを修復する「金継(きんぎ)ぎ」という技術がありますが、割れたり欠けたりした部分をうるしてつなぎ繕うことです。傷をなかったことにするのではなく、歴史として受け入れ、景色として楽しみます。割れたものを繕うことで新たな美的価値を与え、もう一度、命を吹き込むのです。壊れることも受け入れる「わびさび」の精神が活かされた金継ぎは、エゴやリサイクルという世界的な潮流の中で注目されています。

茶道では枯葉のことを照葉と呼び、自然に枯れていく姿を美とする感性が息づいています。老いや衰えの時期を、照らされる時として明るく受け取りたいものです。ひと雨ごとに気温が下がり季節が進みます。そろそろ冬支度を始めましょう。皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当 久郷 直子

